慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 白い肌の黒人たちの行く末：黒人小説に見る共同体とパッシングの関係性について |
| Sub Title | |
| Author | 伊藤, 公子(Itoh, Kimiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人 |
| Publication year | 2022 |
| Jtitle | Colloquia (コロキア). Vol.43, (2022. ) ,p.27- 46 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 米文学 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20221215-0027 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 白い肌の黒人たちの行く末 *
## ——黒人小説に見る共同体とパッシングの関係性について——

伊藤　公子

**1. はじめに——カラーラインとパッシング**

アフリカ系アメリカ人、ないしは黒人とひとことでいっても、決して一枚岩ではない。それぞれが異なるルーツを持ち、祖先が北米大陸に来た時代も理由も異なる場合があるからだ。黒人の定義には肌の色があるが、[1] いわゆるスキンカラーも千差万別だ。

同じ黒人でも肌の色の濃淡が異なってくるのは、そもそも奴隷貿易という弊害があったからである。白人至上主義の世界において、17 世紀からヨーロッパで黒人の奴隷貿易が始まり、18 世紀に最盛期を迎え、やがてアメリカで彼らは動産として扱われた。そして、白人農園主と黒人奴隷女性の間に生まれた肌の薄い色の子供も奴隷として扱われたが、Frederick Douglass (1818–1895)の自伝 *Narrative of the life of Frederick Douglass, An American Slave, Written by Himself* (1845)に書かれているように、混淆の子は農園主の妻から嫉妬されないように、また奴隷間で優遇しつつも、同じ黒人に鞭を打つようにしむけるのがつらいからと、農園主の思いひとつで幼いうちに待遇の良い農園主に売りに出されることが多かった (14)。その子孫は世代を重ねるほどに黒人の血が 2 分の 1、4 分の 1 (いわゆる quadroon)、8 分の 1 (octoroon)となり、白人に見間違えるほど肌の色が薄くなっていく。とはいえアメリカという国は、1 滴でも黒人の血が入ったら黒人とみなされる「血の 1 滴の掟 (One-drop rule)」[2] があるため、黒人として扱われることに変わりはなかった。

この肌の色の違いは「カラーライン (color line)」として呼ばれ、*Oxford English Dictionary* によれば“ 2 Originally and chiefly U.S. An enforced separation between white people and black people (or occasionally those of other racial groups) in a country, community, or establishment”とあるように、奴隷制廃止と公民権運動後も続く、人種差別や人種隔離を指す用語とされた。そして Douglass は早くからこの用語にこだわりを示した。1840 年から 1860 年代にかけて、アフリカ系アメリカ人の主要な活動家 (元奴隷も含む)がイギリス

---

*本稿を執筆するにあたり、非常に丁寧かつ示唆的なアドバイスを賜りました慶應義塾大学教授・大串尚代先生ならびに佐藤光重先生に深く感謝申し上げます。

[1] 人種の分類で知られているのは、ドイツの医学者 J.F.Blumenbach による五つの分類[Oriental, American Indian, Caucasian, Malay, African]である。Malay はアジア人を指す。(*The Mismeasure of Man*. p409)　肌の色による分類は 1850 年からセンサスで使用。1790 年のセンサスの調査票は記入欄が［名前/職業/自由白人男性・自由白人女性・その他すべての自由人・奴隷］であったが、1850 年は自由人［名前/年齢/性別/Color (White, Black or Mulatto)］、奴隷「名前/年齢/性別/Color (Black or Mulatto)］と表記された。1890 年には［名前及びイニシャル・姓・世帯主との関係・(白人、黒人、2 分の 1 混血、4 分の 1 混血、8 分の 1 混血、中国人、日本人、インド人)］と変わった。(『歴史のなかの人種』32)

[2] 1875 年から 1960 年代までアメリカ南部における州・郡・市町村レベルで行われた、人種を実体化させた人種隔離政策であるジム・クロウ法の礎となったもの。地域によって確定期や内容は異なるが、たとえばヴァージニア州では 1910 年まではアフリカ系の血を 4 分の 1 以上持つものが黒人と決められたが、1910 年には 16 分の 1 に、1924 年の「人種純血保全法」では先祖の中に 1 人の黒人も混血もいない純粋なコーカソイドのみが白人だと定義され、1930年までには法律で黒人規定のための「血の一滴の原則」が確定し、さらに黒人と白人との結婚を禁じた。(『白人とは何か？』93、『人種差別の世界史』148)

とアイルランドを訪問していたが、Douglass もその一人だった。彼は 1845 年からアイルランドとイギリスで 2 年間過ごした際、現地での人種に対する偏見のなさに驚き、その時のことも含めて *North American Review* 1881 年 6 月号に“The Color Line”という記事を寄稿し、“Out of the depths of slavery has come this prejudice and the color line” (573)と記している。彼はトランスアトランティックに活動する人々とのネットワークを深めることで、アメリカを基盤とした文脈から離れ、トランスナショナルな視点から奴隷制批判を政治的に行なった。一方、W. E. B. Du Bois は *The Souls of Black Folk* (1903)の「序想」において、“for the problem of the Twentieth Century is the problem of the color line” (5)と問題提起をし、加えて“Of The Dawn of Freedom”と題された第二章でも以下のように、黒人奴隷の問題が南北戦争の真の原因であると主張し、カラーラインという問題を重視して幾度も取り上げている。

> It was a phrase of <u>this problem</u> that cause the Civil War; and however much they who marches South and North in 1861 may have fixed on the technical points of union and local autonomy as a shibboleth, all nevertheless knew, as we know, that the question of Negro slavery was the real cause of the conflict. (102: underline mine)

また、Alice Walker (1944– )は肌の色の問題を、*In Search of Our Mothers' Gardens* (1983)に収録したエッセイ“If the Present looks Lke the Past, What Does the Future Look Like?” のなかで「カラリズム (Colorism)」と呼んだ。彼女は “prejudicial or preferential treatment of same-race people based solely on their color” (290–91) と定義し、カラリズムとは肌の色に基づいた非公式のカースト制度とした。

もちろん、白人に近い肌を持つ黒人の方が社会的立場は良くなるため、白人と結婚するとなると、ことさら事情は大きく変わる。Jodi O'Brien は具体的に次のように述べている。

> Marriage is one means, in addition to employment, of advancing oneself socially and gaining access to social power. . . . Gradations in skin color effect the socioeconomic status of African Americans as strongly as does race itself. Several studies show that, as a way of advancing oneself via the marriage market, lighter-skinned African Americans are more likely than darker-skinned African Americans to marry and to marry higher-earning, better financially endowed spouses. (O'Brien 148)

ここでは「肌の色の変化は、人種そのものと同様に、アフリカ系アメリカ人の社会経済的地位にも強く影響する」と説明されているが、肌の白い黒人が白人になりすまして白人と結婚し、白人社会で生きていくことは珍しくなかった。つまりこれが「パッシング (passing)」である。

従って、パッシングには「なりすます」という意味がある。たとえば Werner Sollors は、パッシングについて社会学者 Louis Wirth と Herbert Goldhamer、Joel Williamson の以下の定義を紹介している。“an attempt on the parts of Negroes to enter into the white community in a fashion that world otherwise be forbidden because of racial barriers” (Sollors に引用 247、Louis

Wirth, and Herbert Goldhamer 301)、“crossing the race line and winning acceptance as white in the white world” (Sollors に引用 247、Williamson 100)。

パッシングは単に人種の境界を超えることを意味するだけではない。なぜなら、パッシングには常に危険が伴うからだ。生まれた子供の肌の色によっては、出自が黒人であることが明らかになるという不安が、孫の世代やその先までも続くことに変わりはない。Charles W. Chesnutt (1858–1932)や Nella Larsen (1891–1964)といった黒人作家が、あえて混血の人間を主人公とする小説を書いたのは、作家自身が黒人なのか白人なのかという肌の持ち主で、カラーライン上の葛藤を経験をしているからであろう。また、Douglass は白人の奴隷制廃止論者の支援を受けて、多くの白人読者を獲得していたが、その Douglass について著書を出版し、当人と親交のあった Chesnutt も、彼同様に白人に読んでもらおうとしていた (McElrath Jr. and Leitz Ⅲ “Introduction” 22)。

また、ハーレム・ルネサンスの時代は、黒人のアイデンティティが確立され始めた時代であり、だからこそ黒人のアイデンティティの揺らぎを描いた Jessie Redmon Fauset や Larsen などのパッシング小説が注目されるようになったのであろう。[3] しかし、以前から白人の推薦文がないと黒人作家が書いたものと認められなかったように、ハーレム・ルネサンス当時も黒人作家の活躍の多くは白人のパトロンによって成り立っていたことは知られている。[4] そして、苦悩した肌の色の薄い黒人のみならず、白人もカラーライン上の黒人の生き方に興味を持ち、読者でもあったと察することができる。

以上を念頭におき、本論では黒人によるコミュニティとパッシングについての関係を考察するにあたり、19、20、21 世紀それぞれの作品から検討する。Charles W. Chesnutt の短篇作品 (1899)、Larsen の *Passing* (1929)、Toni Morrison (1931–2019)の *Paradise* (1997)、Brit Bennett (1990– )の *The Vanishing Half* (2020)を取り上げる。[5] そして、それぞれの共同体の目的や背景を比較考察しながら論じていく。

## 2. Chesnutt とブルー・ヴェインズ

Charles W. Chesnutt は、彼自身が肌の白い黒人であった。彼が描く短篇の中心には「ブルー・ヴェインズ (青い血統)」という組織があり、その会員による社交界の模様が描かれている。Chesnutt の両親は南北戦争以前から自由黒人という扱いであったため、彼は奴隷

---

[3] Sollors は、パッシング小説の最初の世代として Chesnutt や、James Weldon Johnson の名前をあげ、第２世代の代表としてハーレム・ルネサンス期の Jessie Redmon Fauset の名前をあげている (275)。しかしここでは、後者ついては Fauset 作品よりも Larsen 作品の方が、同じなりすましでも白人と黒人の世界を行き来することでの不安や葛藤、人種差別の理不尽さを描くことに注力していると捉え、タイトルもその行動を指している小説 *Passing* を取り上げることにした。George Hutchinson も次のように Larsen を評価している。“Larsen, in contrast, never stopped thinking of herself as a Negro (and a mulatto, and a Danish American), but at the heart of her fiction was one of the most incisive protests against the inhumanity of the color line and its psychic cost ever penned in American literature.” (186)

[4] *Passing* の献辞に Carl Van Vechten 夫妻の名前があるように、Vechten は Larsen に多大な援助をしたことで有名だが、Edward White は“but even she was arguably a greater influence on Vechten than the othrer way around” (*The Taste Maker* 216)と述べる。また、森あおいは「白人のパトロンの存在が、ハーレム・ルネサンスから黒人文化としての純粋性を奪っていたという批判もある」(“トニ・モリスンの『ジャズ』と「私の心のハーレム」を中心に見る自己表象と芸術性の探求”『ハーレム・ルネサンス』401)という。

[5] Brit Bennett は現代の若手筆頭の作家であり、ベストセラーとなったこの小説が 100 年にわたる 3 世代の黒人女性の生き方を描いていることからも取り上げることにした。

黒人とは異なる生活を、実際に目の当たりに見ていたのだと思われる。彼自身は子供の頃に南北戦争を体験、その最中の 1863 年には奴隷解放宣言、1864 年には逃亡奴隷法廃止と続き、「人種混交 (miscegenation)」という言葉も誕生していた。[6] ブルー・ヴェインズについては "The Wife of His Youth" (1899) の冒頭に以下のように説明がなされていて、より肌の白い人間に自分の家系を近づけていきたいという思いはあるものの、常に黒人と白人というカラーラインの線上で悩む黒人たちの姿が登場する。

> The original Blue Veins were a little society of colored persons organized in a certain Northern city shortly after the war. Its purpose was to establishand maintain correct social standards among a people whose social condition presented almost unlimited room for improvement. By accident, combined perhaps with some natural affinity, the society consisted of individuals who were, generally speaking, more white thanblack. ("The Wife of His Youth" 1)

このように、いわゆる黒人よりも肌の白い黒人たちによって正しい社会基準を確立し、維持しようと構成されたのがブルー・ヴェインズである。しかしその外見からひと目見ただけでは黒人と認識されづらく、かといって白人ではないという立場に悩まされる。そしてのちに Chesnutt が短篇小説をまとめて発表しようとした際に、当時の有力な編集者 Walter Hines Page が彼に提案した副題が "The Wife of His Youth, and Other Stories of the Color Line"であった。Chesnutt はこの副題を気に入っていたという記録がある。その理由は、Chesnutt 自身も悩ませられていたカラーラインについて "that subject, the great problem"と書いていることから察せられる。

> I have not been able to think of any better title, and all the stories deal with <u>that subject</u> directly, . . . So unless there is some good reason to the contrary, I rather think that name would very aptly characterize the volume; and I would like to hope that the stories, while written primarily as attempts as literary art, might by depicting life as it is in certain aspects that no one has ever before attempted to adequately describe, throw a little light upon <u>the great problem</u> on which the stories are strung; . . . . (Chesnutts "Houghton, Mifflin &Co." 127: underline mine)[7]

"The Wife of His Youth"の主人公 Ryder は元々の名前が Sam といい、黒人の妻もいたのだが、奴隷として売られそうになった時に妻が彼を逃し、そのまま北へと向かった。その後 Sam はブルー・ヴェインズに身を置くうちに、名前を Ryder と変えて別人として人生を歩み始める。そして教養も振る舞いも経済的にも申し分ない重鎮になった頃、彼よりもとても若くて教養もあり、肌も白く、洗練された未亡人の Mrs. Molly Dixon との結婚を考える

---

[6] 共和党の行き過ぎた人種緩和の政策を非難し、民主党系の奴隷制支持者の力によって、南北戦争後、アメリカでは異人種間結婚禁止法の制定が加速し、最終的には 38 州まで拡大した。貴堂嘉之"奴隷解放後の「人種」—異人種間混交とホワイトネス"、『大学で学ぶアメリカ史』p. 134。

[7] 1899 年 8 月 23 日付 Houghton, Mifflin & Co.への手紙より

ようになる。しかし、偶然にも南北戦争後25年ぶりにかつての妻と再会し、最後にはMrs. Dixon ではなく、長い間夫の存在を心待ちにしていた肌の黒い妻を選んだのであった。

最終的に肌の黒い妻の元に戻った Ryder に対し、“A Matter of Principle” (1899)では、欲深さから娘の結婚相手を選ぶことに失敗した人物を描く。ブルー・ヴェインズの一員である Clayton は、“People who belong by half or more of their blood to the most virile and progressive race of modern times have as much right to call themselves white as other have to call them negroes” (95)という考えを持ち、愛娘 Alice のために、経済力があり、白人に近い肌の色の男を夫に選ぼうとする。そしてパーティで知り合い、もう一度会いたいと連絡してきたBrownに対して、“If this man is black, we don’t want to encourage him. If he’s the right sort, we’ll invite him to the house” (108)とあからさまな対応を見せようと考える。しかし、パーティには Brown という名前の男が 2 人いたことから Clayton は勘違いをしてしまい、本命と考えていた Brown は他のブルー・ヴェインズの一員の家でもてなされ、その家の娘と婚約してしまう。

“The Wife of His Youth”と“A Matter of Principle”を *The Atlantic Monthly* に掲載するという話をもらった際、Chesnutt は“The March of Progress”も一緒に出版するのであれば、そこに“Forward, Back, and Cross Over”の見出しをつけてはどうかと、Page に手紙で提案している。

> If it should be found available, and the exigencies of magazine space would permit, the three might be published under the general head, “Forward, Back, and Cross Over,” adapting one of the figures in a quadrille— “The March of Progress” coming first, “The Wife of His Youth” next, and “A Matter of Principle” for the “cross over.” (Chesnutts “Walter Hines Page” 97)[8]

しかし、残念ながら *The Atlantic Monthly* に採用されなかったため、この案も流れてしまった。Chesnutt は、なぜ“The Wife of His Youth”にあたる言葉として“Back”を選び、“A Matter of Principle”に匹敵する言葉として“Cross Over”と付けたのであろうか。自分よりも肌の黒い相手と結婚することが「後退する (back)」ということではない。Mrs. Dixon ではなく、昔の時間を共にしてきた妻を選んだことで、自分の過去をも受け入れつつ将来も幸せに過ごせると見越し、黒人としてのルーツを大切にすることを意味するのであろう。後半で取り上げる *The Vanishing Half* の登場人物のひとりである Kennedy が、“Memory works that way—like seeing forward and backward at the same time. In that moment, she could see in both directions” (324–25)というのも、同じことを意味していると思われる。“Cross Over”は “Our fate lies between absorption by the white race and extinction in the black” (“The Wife of His Youth” 7)というブルー・ヴェインズの考え方から察して、白人種に吸収されることを望んでいる Clayton のように、白人になりすますためにカラーラインを渡ることを指していると考えられる。

Chesnutt の短篇におけるブルー・ヴェインズという共同体の人々は、パッシングをして白人になりすまして白人社会で生きるか、もしくは黒人のままかという二者択一の世界で

[8] 1897 年 2 月 13 日付 Page への手紙より

はなく、より白人に近い生活を送るために、経済的にも知的にもより良い生活を送るための向上心を意識して掲げているのではないだろうか。そして*"To Be an Author" The Letters of Charles W. Chesnutt 1889–1905* の"Introduction"にあるように、ブルー・ヴェインズを描くことで、Chesnutt は白人読者に中流階級の黒人の実態を知らせることに成功したといえる。

> For his middle-class white readers of "The Wife of His Youth, and Other Stories of the Color Line", he not only made the perhaps surprising revelation of the existence of an African-American bourgeoisie but demonstrated that its values and aspirations were identical to theirs. (McElrath Jr. and Leitz III "Introduction" 22)

bell hooks は、*Whiteness in the Novels of Charles W. Chesnutt* のなかの"Introduction —Black Looks: Race and Representation"において、アフリカ系アメリカ人の作家の第一世代として Douglass や William Wells Brown の名前を挙げ、主にスレイヴ・ナラティヴというジャンルを扱っているとしている。そして第二世代にはほとんど白人のエリート読者だけを対象に執筆した最初の作家として、Paul Laurence Dunbar と Chesnutt の名前を挙げる。[9] さらに政治家色の強い Douglass と作家然としている Chesnutt とを次のように比較している。

> in the case of Douglass, . . . In other words, the origins of African American writing in the nineteenth century are polemical and found in the political urgencies of the antislavery crusade and subsequently in the attempt to preserve the emancipationist vision of the purpose of that war. Chesnutt, though, clearly conceived of himself as a writer of "literature" —more specifically, of imaginative literature that would keep alive Douglass's emancipationist vision in what was one of the darkest periods for African Americans. (hooks 8)

Chesnutt は Douglass について書籍を発表する一方で、作家として奴隷解放運動のヴィジョンを豊かな表現とともに文学に描いてきた。とはいえ Chesnutt は、"The Marrow of Tradition" (1901)で 1898 年にノースカロライナ州ウィルミントンで起きた人種差別暴動を題材にし、パッシング、リンチ、異種混淆といった問題から人種的正義を訴えることに挑戦した。しかし、読者から思うような反響を得られず、失望し、早くに筆を折る結果となってしまった (Andrews 221–22)。カラーラインという問題は、短篇世界で描かれるブルー・ヴェインズという社交界を通しては興味をそそり、好まれるのだろう。しかし、奴隷経験を経て、雄弁家や政治家としても活動した Douglass とは違い、自由黒人の家庭に育った Chesnutt のようなストーリーテラーが正義感と共に現実世界を小説に持ち込むことは、白人たちには受け入れ難いものだったと考えられる。ブルー・ヴェインズはパッシングし

[9] bell hooks, "Introduction —Black Looks: Race and Representation" Matthew Wilson, *Whiteness in the Novels of Charles W. Chesnutt*, p. 8.

やすい環境を生むというより、レベルの高い生活を目指すためのコミュニティであった。こうしてみると、肌の白い黒人たちの夢として読まれていた部分も多かったのであろう。

**3. Larsen とパッシング**

Nella Larsen は、デンマーク人の血を引く母親と西インド領からの移民である黒人の父親との間にシカゴで 1891 年に生まれた。しかし父親は彼女の生後間もなく死去し、母親がデンマーク系の白人と再婚し、翌年、妹を産んだために、複雑な環境の中で育つこととなった。

*Passing* は彼女にとって 2 作目の小説となる。舞台は 1927 年、Irene Redfield が滞在中のシカゴで、白人しか入れないような高級ホテルのカフェで偶然 Clare Kendry と出会ったことから始まる。二人は肌の色が白いため、黒人であると疑われなかったのだ。Irene は、自分よりも肌の色の濃い医者 Brian Redfield と結婚し、2 人の息子と 2 人の黒人のメイドと共に経済的に安定した生活を送っている。白人になりすました Clare は、白人至上主義者であり国際銀行家の Jack Bellew と結婚し、10 歳の娘がいる。

まず、パッシングをした Clare には共同体と呼べるものがない。父親の死後、シカゴのサウスサイドからウエストサイドにある叔母家族に引き取られたが、そこは白人一家だった。父親の Bob は、叔母たちの兄が黒人の少女を誘惑したことから産まれた子だったのだ。敬虔なキリスト教徒の家庭だったため、過ちを犯した Bob の父親は白人女性と結婚し、それが Clare の母親なのだが、早世した。従って、Clare には兄弟もいないため、近しい身内は一人もいないのである。Irene と再会した Clare は、12 年前のことを次のように話す。最初はサウスサイドに住む、昔の友だちについて回顧する。

> You can’t know, ’Rene, how, when I used to go over to the south side, I used almost to hate all of you. You had all the things I wanted and never had had. It made me all the more determined to get them, and others. Do you, can you understand what I felt?” (17)

次は、ウエストサイドでの自分の置かれていた環境について話している部分を紹介する。

> “The aunts were queer. For all their Bibles and praying and ranting about honesty, they didn’t want anymore to know that their darling brother had seduced—ruined, they called it—a Negro girl. They could excuse the ruin, but they couldn’t forgive the tarbrush. They forbade me to mention Negroes to the neighbors, or even to mention the south side. You may be sure that I didn’t. I’ll bet they were good and sorry afterwards.” (17–18)

Clare は、叔母から黒人の血が流れていることを隠匿するよう言われていたため、実際は叔母の家で黒人扱いされて働かされていたにもかかわらず、ウエストサイドでは白人として過ごしていた。しかし Jack が南米で莫大な金を手にしたと知って、彼に近づき、18 歳になった日にシカゴを離れて結婚したという。Clare は Irene の家族を除き、それまで友人と思っていた人たちから無視されたり、白人相手に商売をしているなど噂を立てられた

りして、いい思いをしなかったと話す。また結婚したとはいえ、白人の生活とお金が目当てであり、娘の Margery もスイスの学校に行かせていて、“Children aren’t everything” (64) と言っているほど、夫にも子供にも愛情を抱いていない。チャリティ等にも興味を見せない Clare には、どこにも属するコミュニティがないのである。その身軽さゆえパッシングを容易にできたのだろうし、叔母たち白人としばらく生活したことで白人らしい話し方や所作なども身につけることができたのであろう。しかし、Irene と再会したことで、自分にとって居心地の良い場所を再認識し、一緒に過ごしたいと思い始める。やはり彼女は共同体がほしかったのである。Clare は Irene に以下のように吐露している。

> “I would if I could, but I can’t. You don’t know, you can’t realize how I want to see Negroes, to be with them again, to talk with them, to hear them laugh.” (56)

一方、子供の頃から裕福な家庭に育った Irene は、夫を愛している様子は感じさせないが、かといってパッシングしている Clare に興味はあっても危険を冒すようなことはしない。また、彼女には女友達や、知的好奇心を満たしてくれる年配の白人著名人 Hugh Wentworth のような男友達がいて、パーティを開けば必ず集まるという気心の知れた仲間がいた。組織化されたものではないが、いわゆる黒人女性を中心としたコミュニティは自然と出来上がっていたし、The Negro Welfare League の委員をして福祉に携わり(53)、公共圏へ参加していることは彼女の自負も満たしていた。ただし Irene 自身、以下のように自分たちの黒人社会の寛容度は広いとしつつ、保守的ゆえ、世間体を気にするタイプであることは認めている。

> It wasn’t she assured herself, that she was a snob, that she cared greatly for the petty restrictions and distinctions with which what called itself Negro society chose to hedge itself about: but that she had a natural and deeply rooted aversion to the kind of front-page notoriety that Clare Kendry’s presence in Idlewild, as her guest, would expose her to. (15)

Clare に対しても、面倒なことには巻き込まれたくないことを直接言い放っている。

> All I’m concerned with is the unpleasantness and possible danger which your going might incur, because of your situation. To put it frankly, I shouldn’t like to be mixed up in any row of the kind.” (55)

黒人のダンス・パーティに Clare が顔を出すことに対し、白人と勘違いされる外見で、1 人でやってくると娼婦のように思われるかもしれないという危険性から、Irene は“As we’ve said before, everything must be paid for” (56) とまで言うのだが、Clare はそもそも親密な家族もいないため、愛情や信頼関係といったことに希薄で、理解しようとすることもなかった。この小説の舞台となる時代が、黒人が自らのアイデンティティを表現しはじめたハーレム・ルネサンスで、Ma Rainey や Bessie Smith といった自由奔放な女性のブルー

スシンガーが一世を風靡したとなれば、羽を伸ばす黒人女性が増えていてもおかしくはない。自分がパッシングできる外見であると気付いていた Clare は、常に誰かに見られていたり、監視されていたりするような状態は苦痛ではなかったと思われるが、周囲にかかる迷惑について考えたことはなかった。悲劇的結末を迎えてしまうのは、心を委ねられる居場所、共同体がなかったからではないかと推測できるが、それ以前に、Jack に黒人だと露見した時の対応策を準備していなかったことから、もはや自分の身を守ることにも興味がなかったのではないかと考察できる。

孤独だった Clare は Irene と再会したことで、黒人たちによる共同体という居場所を見つけた。かつては黒人から白人へとカラーラインを越えた彼女は、今度は白人から黒人へとあらためてカラーラインを越えようとするのである。黒人のコミュニティは子供の頃から馴染んだ世界であり、なりすますことなく戻れるのではないかと思ったのではないだろうか。Gregory Phipps は以下のように説明する。

> This community is a liminal setting that straddles the past, present, and future. For Irene, Clare represents the scene of her youth, but for Clare, Irene represents the possibilities of entering an African American social environment in the future. Yet the unifying force between the past and future involves the foreseen emergence of a community built around shared experience, an ambivalent sense of solidarity, and cultural practices and activities (including passing). From the start, the relationship between Clare and Irene is mediated by the idea of a community among African American women. (Phipps 194)

つまり、最初の高級ホテルのカフェで、Irene が Clare の瞳を見て“Ah! Surely! They were Negro eyes! Mysterious and concealing” (Larsen 20) と気づいたように、同じ地域に育った黒人女性同士に通底する意識が自然と生じているのである。そして Phipps は、2 人を対比して次のように記す。

> Clare stands for a pragmatic approach to setting, personifying fluidity, mobility, pluralism, and the desire for interconnections among black women. Irene, meanwhile, represents stasis, security, and the desire to draw firm boundaries around her community, which is bourgeois, urban, and African American. (Phipps 191)

共同体といえども、Irene は自分や子供の安全に危険を及ぼしそうな Clare には抵抗を感じずにはいられず、逆に反面教師のような彼女を見ることで、Irene が目指す都会の黒人女性らしい生き方を見直すことができた可能性が示唆される。

Clare は肌の白い黒人女性間で新しい形の連帯を生み出そうとして、自宅でのお茶会に Irene と、肌の色の白い黒人女性 Gertrude Martin を招待する。Clare は 3 人の絆を深めるために、3 人だけが共有できると思ったシニカルなジョーク、つまり夫が Clare のことを “Nig”と呼ぶ理由を説明するように夫に仕向ける。妻が白人だと信じている Jack は、

“When we were first married, she was white as—as—well as white as a lily. But I declare she’s getting’ darker and darker. I tell her if she don’t look out, she’ll wake up one of these days and find she’s turned into a nigger” (29)と話す。これを聞いた Irene と Gertrude は、表面上は体裁を繕っても、実際は怒りと憮然、恥辱にさいなまれ、同じ感情を抱けない Clare と新しい連帯を生むことは無理だと感じてしまう。しかし、このジョークに心を痛めることのない Clare は、もはやカラーラインの線上にいる人種というものに関心を持てなくなっていたのではないだろうか。

Claudia Tate はこの小説にとって人種は単に説得力のある社会問題というよりも、サスペンスを持続させるための装置であるとし、この作品の中心的な対立は、Clare に対する Irene の嫉妬から生じており、せいぜい物語の周辺にある人種問題から生じているわけではないとする。

> . . . for the purposes of this study Passing is treated as a romance of psychological intrigue in which race is more a device to sustain suspense than merely a compelling social issue.
>
> The work’s central conflict develops from Irene's jealousy of Clare and not from racial issues which are at best peripheral to the story. (Tate 143)

しかし、最後の死に至るための飛び降りる場面は明らかに「何かを超えること」を示唆しているのは確かだろう。Judith Butler が、“Here, as Henry Louis Gates, Jr. suggests, passing carries the double meaning of crossing the color line and crossing over into death: passing as a kind of passing on[10] ” (Butler 183) と、Gates の考察に同意しているように、ここでのパッシングは肌の色を越える意味と、死に向かうという二重の意味を帯び、つまりある種の死に向かうことなのである。貧困で孤独な黒人としての生活も、裕福ながらやはり孤独な白人の生活も双方経験してきた Clare にとっては、人種云々よりも、安心していることのできる居場所＝共同体が欲しかったとしても不思議ではない。そして、肌の色の境界線を越えるというより、肌の色の無意味さを訴えたかったのではないだろうか。真っ白な雪の上に落ちても、やがて雪は溶けてしまう。ありのままの自分を受け入れてくれるコミュニティが欲しかったのだと考察できる。

**4. Morrison とルービィ**

Toni Morrison の *Paradise* で描かれるルービィという黒人共同体は、血の純潔性にこだわり、背が高く優雅で、肌が漆黒の深い「八岩層 (8-rock)」のような色をしている黒人が集う、家父長制の強いコミュニティだ。ただし、この共同体はパッシングとは直接関係はない。肌の白い黒人を軽蔑し、排除しているため、パッシングを行うような黒人はここに居住できないからである。

小説の内容をごく簡単に説明するならば、家父長制／女性社会、もしくは男性中心の共同体 (ルービィ)／女性たちの共同体 (修道院)の二項対立が描かれていると考えること

[10] Henry Louis Gates, Jr., *Figures in black: words, signs and the “racial”self*. p203

ができるだろう。ただし、これまでの Morrison の小説で描かれてきたその町に自然と発生した黒人のコミュニティとは違い、メンバーも肌の黒い黒人に限るという、意識的に立ち上げられた町ルービィである。まず南北戦争後に、ミシシッピとルイジアナ出身の黒人 9 組の大家族総勢約 158 人がオクラホマへと希望を持って移住したことに端を発している。しかし、招かれたと思って移住を試みたものの、実際はオクラホマ州のフェアリで白人からも先住民からも拒絶され、さらにあまりに貧しく、肌が黒過ぎたために色の薄い黒人からも嫌われ、娼婦たちからも嘲られる。そこで彼らは決意新たに、さらに西へ移動し、1890 年にヘイヴンを建設する。とはいえ、大恐慌や第二次世界大戦を経て衰退の一途を辿ったため、始祖 Zechariah Morgan の孫にあたる双子の Deacon と Steward は再び新天地を求め、ヘイヴンの人種主義や理想主義を強化したルービィを 1951 年に建設するに至る。

物語は、アメリカ建国 200 周年を迎えた 1976 年に、9 人の「八岩層」の男たちがふしだらとされる女性たちが住む修道院を襲う場面から始まる。当時のルービィは子孫を増やしたいものの、戦争で子供を亡くしたり、子宝に恵まれなかったり、障害児ばかり生まれたりするなど、町に不幸が続き、また、Zechariah がヘイヴンのシンボルとして作った the Oven に若い世代の者たちが意に反する落書きをするなど、思想も町も目に見えるようにして衰微していた。そこで秩序を重んじる保守的な男性たちは、修道院が自分達の権威を脅かす存在であると決めつけ、襲撃を決行する。小説の冒頭は襲撃の場面から始まるが、その後、女性の名前を 9 つの章に使いながらそれぞれの人生が物語られ、意表を突くエンディングへと向かう。

そもそも Zechariah からはじまる理想の町づくり、すなわちヘイヴンからルービィへの展開は、ヘイヴンがステイト・インディアンの土地を奪ったことから始まるように、時代設定から考えても、Morrison が彼らを黒人たちのピルグリム・ファーザーズとして意識して描いていると解釈できる。また、有無を言わさぬ修道院への襲撃は、魔女狩りを想起させる。さらに、ヘイヴンが建設された 1890 年は、ちょうど自警団 (a vigilance committee) が増加していた時期であるため、「自分達の楽園を築く」＝「自分達のことを自分達で守らなくてならない」という他者排除が強化された時期に重なる。というのも、Douglass が *The North American Review* の 1892 年 7 月号に“Lynch Law in the South”という一文を寄せ、自警団に苦言を呈しているのだが、その時の記述“Like the gods of the heathen these mobs have eyes, but see not, ears, but hear not, and they rush to their work of death as pitilessly as the tiger rushes upon his prey” (18)は、「八岩層」と呼ばれる黒人の集団が修道院を襲撃する様子そのものであるからだ。「自分達のことを自分達で守らなくてならない」というルービィの規制は、彼らの One-drop rule によって、肌が漆黒の色でない人々を排除しているのである。

なぜ、ルービィは理想の共同体になり得なかったのか。黒人純潔主義に固執するためには、女性には正規の結婚を経て、同じ共同体の男性との間に子供を作ることが義務化される。しかし前述のように子供に恵まれないなど、幸せと呼べる家族は少ない。そのうえ女性は家父長制から「妻」もしくは「娼婦」と分類されるなど、明らかな性差も生じている。従って、Sweetie や Billie Delia など、シェルターと化した修道院へ逃げていく女性が出てくるし、夫の浮気を案じていた Deacon の妻 Soane は、不倫相手だと思っていた修道院の主 Consolata と親しくなってしまうのである。

Billie Delia は襲撃の後の会葬の場で、以下のような思いに浸る。

> A town that had tried to ruin her grandfather, succeeded in swallowing her mother and almost broken her own self. A backward noplace ruled by men whose power to control was out of control and who had the nerve to say who could live and who not and there; who had seen in lively, free, unarmed females the mutiny of the mares and so got rid of them. (308)

対極にある修道院は自然発生的で、来る者は拒まずというスタンスを貫き、ルービィよりもパラダイスなイメージをもたらす。訳あり女性たちのシェルターとなり、性格の合わないもの同士もいるが、また、お金はないなりに自給自足の生活で賄っている。その緩さに、ルービィの男たちの中には、K.D.が Gigi (Grace)と付き合っていたり、Deacon が Consolata と付き合っていたりなどしている。そしてそれは K.D.や Deacon のルービィの内での恋愛や結婚生活よりも、修道院に暮らす Gigi (Grace)や Consolata と関係の方が純粋な恋愛だと感じさせるほどだ。さらに Billie Delia が“She hoped with all her heart that women were out there” (308)と願うほど、修道院にいる女性たちは、やはりルービィの女性たちに好かれていることもわかる。

本来ヘイヴンと同様、人種差別から逃れた生粋の黒人だけの楽園であったはずのルービィは、同じ黒人でも肌の色で差別することになり、他者との関わりを拒否し、閉鎖的な社会となっていく。それゆえ修道院に移り住み、結婚することなくそこを楽園として自由に暮らす独り身の女性たちは、ルービィの男性たちにとって秩序を乱す脅威の象徴としか思えないのである。ルービィの始祖である Deacon は内政を見直すよりも、保身や権威のために女性たちを排除する必要があった。拒絶してきた人に対して拒絶を持って応じ、また、他者を受け入れたものは追放するという主義だったために、コミュニティ内でも反発が生まれるのは当然であろう。Martin Luther King に傾倒する若き Richard Misner 牧師が “Soon Ruby will be like any other country town: the young thinking of elsewhere; the old full of regret” (306) と説くように、その後のルービィの衰退はいうまでもない。いわば白人が先住民や黒人に対してやっていきたことを、立場を逆にして Morrison は描いているのである。Misner 牧師が“They think they have outfoxed the whiteman when in fact they imitate him” (306)と言っているように、結局は白人の真似をして、自分たちを拒絶してきた人たちを拒絶し、さらにはある種の黒人が別の種類の黒人を拒絶してきたからこそ、“their selfishness had trashed two hundred years of suffering and triumph in an moment of such pomposity and error and callousness it froze the mind” (306)という結果を招くこととなる。

Morrison は *Playing in the Dark: Whiteness and The Literary Imagination* (1992)で、“It has occurred to me that the very manner by which American literature distinguishes itself as a coherent entity exists because of this unsettled and unsettling population” (5–6)とし、“we need the adjective ‘white’ or ‘black’ or ‘colored’ to make our meaning clear. In this country it is quite the reverse. American means white” (47)とした。つまり、Morrison はアメリカ文学を引き立てるために白人が勝手にアフリカ人像を作り上げ、アメリカ人の意味を明確にするには「白人」、「黒人」、「カラード」という形容詞が必要になると述べたが、*Paradise* ではパッシン

グそのものは描かれないものの、立場を逆にして、「八岩層」と呼ばれる黒人の集団によるカラーラインをめぐる人種意識と共同体内の差別を描いている。その意味で「1 滴の黒人の血も認めない」という白人の One-drop rule を逆手にとった小説と読むことができよう。Roger Best のように戦地で肌の白い妻と結婚し、肌の白い子供も連れて戻って来た者は、町の有力者家族から外されてしまうからだ。Roger Best の娘 Patricia はルービィの町の歴史を研究し、父に関するファイルに以下のように記している。同じ黒人同士でも、肌の色の白い黒人には明らかに差別をするのである。

> "Daddy, they don't hate us because Mama was your first customer. They hate us because she liked like a cracker and was bound to have cracker-looking children like me, and although I married Billy Cato, who was an 8-rock like you, like them, I passed the skin on to my daughter, as you and everybody knew I would." (196)

Morrison は黒人／白人の二項対立にとどまらず、修道院に暮らす女性たちについても、Consolata が Morgan らに土地を奪われた南米インディアンの出身という以外は、出自も肌の色も明らかにしていない。[11] "It seems both poignant and striking how avoided and unanalyzed is the effect of racist infection on the subject" (*Playing in the Dark* 11)と述べている Morrison がこの対照的な２つの共同体を描くことで、黒人純潔主義の異常さを際立たせていることは明らかだ (Morrison は白人を際立たせているのは黒人であると主張するように、ここでも「他者」の存在との対峙で強調する)。そして、少しでも差異のある他者を全く受け付けない許容のなさが共同体を崩壊へと導いたのである。

**5. Bennett とマラード**

Brit Bennett の *The Vanishing Half* の舞台マラードも、Alphonse Decuir という始祖によって作られた町である。彼の言葉を借りれば、"A town for men like him, who would never be accepted as white but refused to be treated like Negroes" (6)という、黒人にも白人にも属さない第三のグループとして、より白い黒人になることを美徳としている。いわば、Morrison の *Paradise* で描かれたルービィの逆をいく理念である。Alphonse がマラードを創設したきっかけは、逃亡奴隷法が成立する 2 年前の 1848 年に彼の所有主であった白人の父親が他界したことで、彼が奴隷の身分から解放され、同時に広大なサトウキビ畑を相続したことがきっかけだった。Alphonse の母親は息子の肌の色の薄さを嫌っていた。というのも、奴隷主の子供を産んだ母としては"Lightness, like anything inherited as great cost, was a lonely gift" (6)でしかないからだ。しかし Alphonse は、彼よりもさらに色の薄い混血の女性と結婚し、そこから生まれてくる子供も、さらに肌の色の薄くなるであろうと期待を込めた。そのことは"A more perfect Negro. Each generation lighter than the one before" (6)と描写されている。つまり黒人は進化するものであり、彼は代々肌の色が薄くなる黒人の代表となる血

[11] 修道院で栽培されている唐辛子の色に暗示されていると推測できる。

脈でありたかったのだ。結果、理念と場所は分かち難いものとなり、共感する肌の色の薄い人たちはこのセントランドリー群一帯に集まることとなった。

物語は Martin Luther King Jr.が暗殺された 1968 年、ジム・クロウ法によって二項対立が強化された南部ルイジアナ州を舞台に始まる。Alphonse の娘 Adele Decuir は Leon Vignes と結婚後、町の中でも特に肌が白くて美しい一卵性双生児姉妹 Desiree と Stella を産むが、肌の薄さを美徳とするマラードの思想は束縛の印でもあり、双子は町からこっそり出て行ってしまう。Bennett はそこから双子の生き様、さらに Desiree の娘 Jude と Stella の娘 Kennedy が母親たちの生き方や環境からどのように影響を受けるのか、アイデンティティがもたらす心の傷までもあぶり出し、3 代の 100 年に及ぶ生き様を描く。

前半は、お転婆で演劇好きの Desiree とおとなしくて勉強のできる Stella を中心にストーリーが展開する。特に Desiree は、「誰の妻の肌が一番色白か？」などと住民全体が色の薄い肌への強い執着を持つ狭い世界を嫌い、早くからこの町を出たがっていた。しかも実際に白人が Desiree の父親に会いにくると、色の薄い肌は何の意味もないため、そこまで彼らが白さにこだわる意味がわからなかったのである。Desiree は、色が黒くて逞しいと感じた男性、後に結婚した Sam に、マラードの人たちについて“Because. They funny down there. Colorstruck. That’s why I left” (23)と話しているほどである。

ただし、マラードがブルー・ヴェインズともルービィとも異なる点は、女性主体の共同体であるところであろう。代々、Decuir 一族は苦労もなく生活することができていた。しかし、Adele が酒場を営業する Vignes 家の息子 Leon と結婚し、しかも Leon がリンチで殺されたことで、双子の娘たちは高校を中退しなくてはならないほど苦労を強いられる。それについて、町の人間に“Once you mixed with common blood, you were common forever” (67)と、言われる。つまり、裕福な始祖の家系であろうと、庶民の血が混じってしまえば永遠に庶民でしかないと、まさに One-drop rule と同じことを指摘されるのだ。双子はマラードを出て、最初のうちは一緒にニューオーリンズで生活するが、突然 Stella が部屋からいなくなり、消息を絶つ。Desiree は結婚したが、夫 Sam の DV から逃れるために、彼との間に生まれた色の濃い娘 Jude を連れてマラードに戻ってくる。その際、町の理髪師に次のように言われる。

> As far as he [the barbar] was concerned, both were a little crazy, Desiree perhaps the nuttiest of all. Playing white to get ahead was just good sense. But marrying a dark man? Carrying his blueblack child? Desiree Vignes had courted the type of trouble that would never leave. (67)

思想の高い町は、外から入ってきた者、戻ってきた者に対して、常に監視する状態にある。ここでは、黒人に生まれたものの、白人になりすますことは良識があるとされ、肌の黒い黒人と結婚することは疑問視される。しかし、マラードの人々は自分たちよりも肌の色の黒い子供を連れて戻ってきた Desiree の姿に動揺するものの、マラードの主といえる Adele が受け入れたことで、肌の白さにこだわっていた町は寛容化され、開けていく。これには Adele の首領的存在感、そして母と娘という絆があるからだろう。もしこれが

*Paradise* のルービィであったら受け入れてもらえなかったと考えられるが、修道院ならば何の問題もなく受け入れられたであろう。

Stella はニューオーリンズで職を求めて面接を受けたところ、意図していなかったものの、人々が自分を白人とみなすことに気づき、そこからなりすましが始まる。上司の Blake に気に入られて結婚すると、ロサンゼルスの白人居住区で暮らしはじめ、専業主婦として中流階級のコミュニティに長い間、身を置くことになる。

共同体という点から見れば、現代に近づくにつれて女性は社会への参加の場は増えている。Desiree が指紋鑑定官という職を持ったことは自信になっていたし、Stella は向かいに越してきて親しくしていた黒人一家が、白人コミュニティから追い出された後、夫の計らいでかつて大学に進みたくても進めなかった夢を実現させる。大学で統計学と出会い、非常勤講師としてクラスを教えることにもなり、公共圏への参加は彼女にも自信を与えることとなった。

しかし、夫や娘にも自分が黒人であることや過去も明かしていない Stella だったが、女優の卵である娘 Kennedy が、Desiree の娘 Jude に見つかってしまったことから、話は急展開する。というのも、Kennedy は、自分は白人だとずっと思って生きてきたので、まさか黒人の従姉妹がいるとも、ましてや母親が黒人の血を引くなどと思ってもみなかったからだ。そして Jude との間に不思議な友情を感じるようになってきた Kennedy は、そばにいてほしいと願う母 Stella に対して、自分のアイデンティティがわからなくなってきたこともあり、距離を置くことを考える。

> But little about her mother's life made sense. Where had she come from? What was her life like before she'd gotten married? who had she loved, what had she wanted? The gaps. When she looked as her mother now, sheonly saw the gaps. (304–05)

結局のところ、Kennedy は自分に黒人の血が流れていると確認し、白人女性が好きという有色人種の Frank と別れて、旅に出て、また職種も変えて、自身の人生を新たに歩き出す。おそらく *Passing* の Irene の娘 Margery の場合も、自分に黒人の血が流れていると知ったら、相当な衝撃を受けてアイデンティティを見失うであろう。

しかし Stella はというと、一時期、向かいに越してきた黒人家族の家に娘を連れて頻繁に遊びに行ってはいたものの、母の葬儀でも故郷に戻らず、そのまま白人になりすます人生を選択するのである。久しぶりに Desiree に再会した時に、Desiree と住んでいたアパートから何も言わず出ていった理由として「彼と一緒にいる自分が好きだったから」と答えている。夫のことを好きであるものの、それ以上に今までにない自由を感じたことが重要だったのだ。

> "Not for him," she said.
> "I just liked who I was with him."
> "White."
> "No," Stella said. "Free." (361)

Bennett は *Vanity Fair* のインタビューで次のように話している。これは Morrison が先に引用した *Playing in the Dark* での発言に通じるといっていいだろう。

> I wanted to write a book that was not just about Black pain but also about Black love and how people get free—how they can find liberation in very difficult circumstances. (Vanderhoof "Brit Bennett on The Vanishing Half")

ただし、マジックリアリズム的な要素を含む *Paradise* のエンディングに対し、*The Vanishing Half* はとても現実的である。Bennett は話の終わりを 1988 年にしていることもあり、Stella を捕まえるとか、突き落とすとか、殺されるといった悲劇の結末にしたくなかったという。そもそも Clare とは違い、また Desiree とも違い、Stella は子供の頃から数学が大好きで、タイプライティングも得意であったなど、社会に参加しやすい向学心を身につけていたことが大きかったと思われる。もちろん高級デパートの面接で採用されたことは、白人として通ったことと同様に、自信になったことは間違い無いだろう。パッシングしても、家庭以外にも自分らしく過ごせる居場所を見つけられたことは大きかったのである。それゆえ母として、娘の Kennedy に不安定な女優業よりも安定した職を身につけて欲しかった。夫との間に生まれた Kennedy こそが、彼女の人生の真実であり、証拠であったからだ。そのような思いから、娘が幸せにならないと自分の人生も否定されることとなるので、意を決し、Jude が Kennedy に付き纏うのをやめるよう伝えるために、Desiree に会いにマラードまで戻ったのである。

一方、彼女たちを縛り付けていたマラードの町は、1981 年にはすでにこの世から消えてしまう。アメリカ地質調査所などは、単に「人が居住している場所」としか認識していなかったし、80 年に国勢調査が行われた際、群は改めて町の境界線を引いたため、マラードの人々はある朝突然、パルメットという村の住民にならざるを得なかった。結局、Adele が亡くなったことで、Alphonse Decuir によるマラードの思想が消滅してしまうのも時間の問題だろう。もし Adele が息子を産んでいたら、ルービィのように 3 代ほど思想は続いたかもしれない。しかしマラードなき今、子供を出産する女性が自分の恋愛感情を押し殺して、肌の白い男性としか結婚できないというのは、Desiree を見てもわかるように無理難題である。結局のところ、この小説では境界線を引くことの無謀さや共同体というものの存在の曖昧さを描いているように思われる。

## 6. おわりに

Charles W. Chesnutt の "The Wife of His Youth"と"A Matter of Principle"、Larsen の *Passing*、Toni Morrison の *Paradise*、Brit Bennett の *The Vanishing Half* と論じてきたが、Allyson Hobbs が"Skin color and physical appearance were usually the least reliable factors, whereas one's associations and relationships were more predictive" (Hobbs 10) と言うように、誰と一緒に過ごしているかどうかが、肌の色や外見よりも信頼性を高く置かれるのであろう。それゆえブルー・ヴェインズのような社交場は信頼性の高いものであったと考えられるし、そもそも Irene と Clare が出会ったシカゴの高級ホテルのカフェも、場所が場所だけに白人だと認識されて入れたのである。ホワイトネスという特権は、白人が、誰が白人で誰がそうで

ないかを実際に見分けることによって生まれるしかないので、つまりは黒人であっても白人至上主義に則っていることにはかわりはない。

また、Karen E. Fields と Barbara J. Fields はアメリカの政治、社会、経済などに多大な影響を与えている人種主義について掘り下げ、「人種というものは存在しないものの、人種差別が人種という虚構を生み出している」とし、「貧困といった社会状況が人種を生み出す原因の 1 つになっている」と説明している (Fields 265–67)。 これはまさに先住民の土地を奪ってまでヘイヴンやルービィといった町を作り出すことになった要因と言える。マラードは創設時の始祖は経済的に豊かであったが、そもそも白人に憧れて肌の白い黒人を尊重するようになっていたので、やはり白人至上主義には変わりがない。One-drop rule を非難しようが、同じような概念がいつのまにか植え付けられてしまっているのである。また、*Passing* の Clare のパッシングを見ていると、白人の叔母一家に引き取られたものの、そこで彼女は家の中では黒人扱いされたということから、人種がいかに社会的に構築されたものであるかが理解できる。

しかし、*The Vanishing Half* での Stella のような新しい生き方もある。「白人になりすます」というより、「自分らしい生き方」、「自分を好きでいられるから」という考え方から、パッシングはしたものの、自分の所在をカラーラインよりもグレーゾーンへと曖昧にし、それなりに生きられているからである。その背景には、マラードそのものがグレーな存在であったこともあるが、黒人か白人かという、どちらかを拒まずとも生きられるパッシングも可能であると示せたことは大きい。女性の社会進出が時代とともに増え、それに付随して共同体も増え、居場所の選択肢が増えたことも要素として見逃せない。さらに世代を重ね、白人と結婚したならば、黒人の血が 16 分の 1、32 分の 1 と減ってきていることもある。ここまでくると、Kennedy のように知らされないと黒人の血が流れていると知らないまま生きている若者は少なくないはずだ。

黒人が行う「パッシング」には、過去や現実から逃げるための、嘘で固めなくてはならないネガティヴなイメージがあった。しかし、さまざまなコミュニティが増えている現在、社会との関係性から考えても、今後は人生の通過点 (Passing Point)もしくは turning point といった意味合いも加わっていくのではないだろうか。

## 参考文献


Andrews, William L. “Chesnutt, Charles W.” *The New Encyclopedia of Southern Culture*. edited by Charles Reagan Wilson, James G. Thomas, Jr., Ann J. Abadie, U of North Carolina Press, 2008, pp. 221–22.

Bennett, Bridget. “Frederick Douglass and Transatlantic Echoes of ‘The Color Line’” *Transatlantic Literary Exchanges, 1790–1870: Gender, Race, and Nation*, edited by Kevin Hutchings, Julia M. Wright, Routledge, 2016, pp. 101–13.

Bennett, Brit. *The Vanishing Half*. Riverhead Books, 2020. 友廣 純訳『ひとりの双子』早川書房、2022 年。

Butler, Judith. *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of ‘Sex’*. Routledge, 2011. 佐藤嘉幸監訳『問題＝物質となる身体』以文社、2021 年。

Chesnutt, Charles W. “A Matter of Principle,” *Americans in Fiction 4 Chesnutt: The Wife of His Youth.* The Gregg Press, 1967.

---. “The Wife of His Youth,” *Americans in Fiction 4 Chesnutt: The Wife of His Youth.* The Gregg Press, 1967.

---. “Walter Hines Page” 13 Feb. 1897. *“To Be an Author” The Letters of Charles W. Chesnutt 1889-1905,* edited by Joseph R. McElrath Jr. and Robert C. Leitz III, Up of Prinston, 1997, p. 97.

---. “Houghton, Mifflin & Co.” 23 Aug. 1899. *“To Be an Author” The Letters of Charles W. Chesnutt 1889–1905,* edited by Joseph R. McElrath Jr. and Robert C. Leitz III, Up of Prinston, 1997, p. 127.

Douglass, Frederick. “Lynch Law in the South” *The North American Review,* vol.155, No. 428, University of Northern Iowa, 1892, pp. 17–24.

---. *Narrative of the life of Frederick Douglass, An American Slave, Written by Himself*. W.W. Norton, 2017.

---. “The Color Line” *The North American Review,* vol,132, No. 295, Northern Iowa UP, 1881, pp. 567–77.

Du Bois, W. E. B., *The Soul of Black Folk*. Myers Education Press, 2018. 木島始ほか訳『黒人のたましい』未來社、2006 年。

Edward, White. *The Tastemaker: Carl Van Vechten and The Birth of Modern America* [kindle], Farrar, Straus and Giroux, 2015.

Fields, Karen E., Fields, Barbara J. *Racecraft : The Soul of Inequality in American Life*. Verso, 2014.

Gates, Henry Louis, Jr., *Figures in black: words, signs and the “racial”self*. Oxford UP, 1989.

Gould, Stephan Jay. *The Mismeasure of Man*. W. W. Norton & Company, 1996.

Hobbs, Allyson. *A Chosen Exile: A History of Racial Passing in American Life*. Harvard UP, 2014.

hooks, bell. “Introduction —Black Looks: Race and Representation,” pp. 8–18, Wilson, Matthew. *Whiteness in the Novels of Charles W. Chesnutt*. UP of Mississippi, 2004.

Hutchinson, George. *In Search of Nella Larsen a Biography of the Color Line*. Belknap Press of Harvard UP, 2006.

Larsen, Nella. *Passing*. Dover, 2004. 鵜殿えりか訳『パッシング／流砂にのまれて』.みすず書房、2022 年。

Maas Rue, Caroline, "The Unarticulated Unseen: Brit Bennett's 'The Vanishing Half' and Her Intent on Revealing the Unseen in the Tradition of Racial Passing," the Theses, Clemson University, 2022.

McElrath, Joseph R. Jr. and Robert C. Leitz III."Introduction" p. 22 *"To Be an Author" The Letters of Charles W. Chesnutt 1889-1905*, edited by McElrath and Leitz III, Up of Prinston, 1997.

Morrison, Toni. *Paradise*. Random House, 1997. 大社淑子訳『パラダイス』早川書房、1999 年。

---. *Playing in the dark: Whiteness and The Literary Imagination*, Picador, 1933. 大社淑子訳『白さと想像力――アメリカ文学の黒人像』朝日新聞社、1994 年。

O'Brien, Jodi. "Colorism." *Encyclopedia of Gender and Society*. Sage, 2009, pp. 147–50.

Phipps, Gregory. *Narrative of African American Women's Literary Pragmatism and Creative Democracy*, Palgrave Macmillan, 2018.

Sollors, Werner. *Neither Black nor White Yet Both: Thematic Explorations of Interracial Literature*. Oxford UP, 1997.

Tate, Claudia. "Nella Larsen's Passing: A Problem of Interpretation Author(s)," *African American Review*, Vol.14, No. 4, Winter, 1980, pp. 142–46.

Vanderhoof, Erin."Brit Bennett on The Vanishing Half, Protest, and How Change Happens" *Vanity Fair*, 5 June. 2020. https://www.vanityfair.com/style/2020/06/brit-bennett-the-vanishing-half-protest-interview.

Walker, Alice. In Search of Our Mothers' Gardens. Harcourt, 2004. 荒このみ訳『母の庭をさがして』東京書籍、1992 年。

Williamson, Joel. *The Crucible of Race: Black-White Relations in the American South Since Emancipation*. Oxford UP, 1984.

Wirth, Louis, and Goldhamer, Herbert. "The Hybrid and the Problems of Miscegenation." *In Characteristics of the American Negro*, ed. Otto Klineberg. Harper and Row, 1944.

貴堂嘉之"奴隷解放後の「人種」―異人種間混交とホワイトネス"、p134、和田光弘編著『大学で学ぶアメリカ史』ミネルヴァ書房、2014 年。

中條 献著『歴史のなかの人種―アメリカが創り出す差異と多様性』北樹出版、2004 年。

中村久男「カラー・ラインへの挑戦――チャールズ・W・チェスナットの *The Wife of His Youth* の編み方――「言語文化」8–2: pp. 261–84、同志社大学言語文化学会、2005 年。

森あおい"トニ・モリスンの『ジャズ』と「私の心のハーレム」を中心に見る自己表象と芸術性の探求"pp.398–419、松本昇監修、深瀬有希子ほか編著『ハーレム・ルネサンス：〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』明石書店、2021 年。

藤川隆男著『人種差別の世界史―白人性とは何か？―』刀水書房、2011 年。

山田史郎「アメリカにおける白人の形成――先住民・アフリカ人・移民の交錯」pp. 83–94、藤川隆男編『白人とは何か？――ホワイトネス・スタディーズ入門』刀水書房、2005 年。